
クロワッサンみたいな日々 ~夏~

Wonder Forest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロワッサンみたいな日々　　～夏～

【Nコード】

N0932Y

【作者名】

Wonder Forest

【あらすじ】

何時もどおりの日常に、少しスパイスが入ったお話の1部目です。

前編

「好きです。」

放課後の教室で少年は、少女に告げた。

だから俺は、黙って自分の机に向かう。

鞆を取って、教室を出る。ちゃんと防音を気遣って扉を閉めてやる。

二人だけの世界に水を差す輩を入れる訳にはいくまい。

「ふう……。あいつ、千夏にホント、惚れてるなあ」

でもなんだか、放課後の教室で、想い人に告白するってのはいいなあ。

とか考えつつ、下校口を出る。

校門を目指していると、横から強い衝撃。

「っ!!」

びっくりして横に目をやると、先ほど青春をぶつけられていた少女、千夏が怒っていた。

「なんでおいていくかなっ!!私、待ってたんだよ!？」

たしかに、俺が放課後に昨日やっていなかった宿題を提出するから帰ってると言ったのに、

待ってると言った。しかし教室に戻ると、青春がお花畑していた。

つまり、俺は悪くない。

「悪いよ!?!」

最後のところは口に出したようだった。

「いや、青春のお邪魔虫になれってか。」

「外で待つてくれてもいいじゃん!?!」

それも、そうか。

「・・・悪かったな。」

「もう、分かればいいんだよっ」

そう言っと、ころりとしかめ面を綻ばせる。表情豊かな奴だ。

「ねー、帰りにクロワッサン買って帰ろー。」

「昨日はチョココロネ、その前はメロンパン、お前は放課後にパンがないとだめなのか。」

ツッコミをいれておく。

「放課後にパンは絶対だよー」

「だよー」

3人目の声、青春をぶつけた張本人、日下部だ。

「今日で何敗目なん？」

「既に負け確定!？」

俺の質問に、本気で疑問がる日下部。お前3桁に届く勢いで、告白してるだろ。

今も忘れはしない。高校に入学して、自分のクラスはどこかと掲示板を見ている千夏にいきなりこいつは、

「好きです!! 貴方と結婚したいです!!」

バカかと思った。

当然フられたが、めげずに千夏と仲良くなろうと俺に接近してきて、今日に至る。

回想終わり。

とりあえず、今日はいつものパン屋でクロワッサンを食うか・・・正直クロワッサンはイマイチなんだよなあ。

あの味って言うか・・・ときやたら焦げてるし・・・「好きです!!」「いや、日下部、さっきの今で懲りないなお前」

あれ・・・今の女の声・・・？

ぼけっとしていたが、前に千夏とは別の女の子。

隣の千夏と、日下部も驚いた顔。

「私が好きなのは！！日下部くんじゃなくて、英一郎くんです！！」

少女は真っ赤にして告げる。

「俺ですか・・・」

ていうか。誰ですか。

前編（後書き）

はじめまして、わんだーふおれすとです。
こちらの作品は3編構成です。

中編

俺の知らない人が、俺を好きだという。

どこかであつたかなあ・・・こんな可愛い人が知り合いだったら、俺が分からない訳はないのにな・・・。

「今日はそれが言いたくって・・・！！お返事はまだいらないます！！」

そういうと、少女は慌てるように、走って帰ってしまう。

「・・・今の人、誰？英一郎」

「いや・・・、俺に聞かれてもなあ・・・」

「二人とも知らないのか！？2年の立花先輩って言えば男ならチエツクすべき女性だろう！？」

ほう、立花先輩か。記憶の中に面識はないんだがな。

「ねえ、立花先輩と付き合つたの？」

「いや・・・知らない人と付き合つほど俺は、軟派じゃないぞ。」

「知ってたら、付き合つたの？」

「それは、どうだろうな・・・」

「ふうーん。」

なんで俺のことなのに、千夏は不機嫌なのだろうか。

「まあいいや、私帰るね。」

「いや、どうせ帰り道一緒だろ」

「いいのっ!!」

千夏は、俺たちを置いて早歩きで進んでいく。追いかけようと、駆け出そうとすると隣から手を掴まれる。

「ここは、俺のチャンスタイムだ!!絶対に行かせない!!」

「意味わかんねえよ」

「いや、分からないんでいいんでとりあえず、僕と二人で・・・帰る?」

「きもいわ」

「缶ジュースおごるんで」

「よかるっ」

千夏も、もう16歳になる。一人でお家にも帰れるでしょう。

そうして、僕は立花先輩でも千夏でもなく、コーラを選びました。

次の日、千夏は俺を全力で避けた。立花先輩は俺に全力で攻めて来た。

「おい、千夏！！どうして俺を避ける！？」

「別に、避けてないもん」

「いや、おいちよつとまて！！」

「あつ・・・！英一郎君・・・！！」

立花先輩、登場。一気に不機嫌になる、千夏。

「あの・・・これ・・・お弁当作ってきたんだけど・・・何時も、英一郎君、学食だよね？」

「いやまあ、そうっすけど・・・」

なんで、知ってるんだろう。

「っ！！よかつたじゃない！！お弁当ももらえて！！」

いきなり興奮して、どこかに行き出す千夏。

「ここは俺に任せておけえええええ！！」

しゃしゃり出る日下部。ていうかお前、いたんだ。

「彼もそう言ってるし、よかつたら一緒に・・・ご飯いいかな？」

「まあ・・・、俺でよければよろこんで」

千夏には、後で謝っておけばよからう。日下部が、全力で追いかけてるし大丈夫だよな。

俺は、立花先輩とお昼を選択した。

美味しそうな匂いに、俺は勝てなかった。

中編（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
次話で1部完了となります。

後編

「先輩は、どうして俺のことを知ってるんですか？」

至極当然の疑問。

「俺は、学校ですし、先輩を見覚えはあるかもしれないけれど、何か話したりした覚えは無いです」

あ、この卵焼きすごい美味しい。

「うん・・・そうだろうね。英一郎君が私にしてくれたのは、きつと通りすがりの優しさだけど。私には、とっても大事な優しさだったの。」

何時から俺は、そんな優しさを振りまくようになったのだろうか。

「いや、本当に分からないんですけど・・・」

「ひみつっ！ですっ！！乙女の秘密は堅いです！」

「そうですか・・・」

乙女の秘密とか言われると気になるけど、聞きづらい。あ、この唐揚げもおいしいな。

「お弁当ごちそう様でした、ちょっと俺用事があるんで」

「千夏ちゃんのところ？」

乙女の直感なのだろうか。恐怖です。

「千夏ちゃんのこと、好きなのかな……やつぱり？」

「・・・いや、別にそんな訳じゃないんですけど、このままだとなんか落ち着かないじゃないですか。ちょっと行ってきます」

英一郎は別れを告げて、駆け出した。

残された少女はつぶやく。

「そういうのが……すきって事じゃないのかなあ……。でも……、告白した私のほうが一歩も二歩も近づいたから……。負けないよっ！」

結局、昼休みに千夏は見つからなかった。今流行のトイレでご飯なのだろうか。

休み時間もすべて、回避される始末。

「待てえ えええええ！」

全力で、下校しようとする、千夏を追いかける。

追いかけるが、千夏早いなあおい、中学校陸上で入賞は飾りじやな

かったのか。

「くそっ……!! 追いつけない!!」

「俺に任せろおおおお!!」

日下部!! いたのか!!

見る見る距離を縮める日下部、あっという間に千夏の手を掴む。

日下部……お前、足めちゃくちゃ速いんだな……。

「ふー、ち、ちなつー、どうして、俺をーさけるー」

「べ、別にさけて……ないもん」

あれだけ走ったのに、肺活量は全然違うらしい。

「っー、俺はなー、お前と何時もどおりパン屋に行かないとな……
落ち着かないんだよ。」

「えっ……、それって……」

「ああ……」

3人の時間が、一瞬止まる。

「俺はな、クロワッサンも案外好きらしい。」

千夏にグーで殴られた。思いっきり。

「もうばかつ!!」

空気と化していた日下部を振りほどいて、歩き出す千夏。

「おい、待てって!!」

「そうです。英一郎君、待ってください。」

立花先輩・・・、俺の回りは皆忍者なのか・・・？

「一緒に・・・帰りましょう?」

「いやです、お断りします」

戻ってきた千夏が俺の手を引きながら、毒を吐く。

「私は・・・、英一郎君に聞いてるんです。」

空いてるもう片方の手を、立花先輩が握りながら歩く。

日下部が少し後ろで、叫んでいる。

「俺の怒りがああああ!!有頂天ううううう!!」

それ、ぱくり。

夕暮れ、今日も、昨日より一枚の層を重ねた。

明日はきっと、明後日はきっと、一枚、もう一枚と、

積み重ねていく僕らの日々、それはきっと、

こうなるまで気付けなかったけど、まるで・・・ね。

後編（後書き）

初めましてなぽぽぽーん、ワンダーフォレストです。

一部は、このお話でおしまいです。いかがだったでしょうか？

二部は、また別のお話となります。

社会人の二人を巡るお話となります。

ぜひ読んでやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0932y/>

クロワッサンみたいな日々 ~夏~

2011年11月17日19時14分発行